KOMAZAWA ✕ FUKUOKA

駒澤大学0－3福岡大学

高かった全国の壁「儚く消えた夢」

３失点目を喫っし、天を仰ぐ森本と、倒れこむ板倉（撮影・中野成博）

試合終了を告げるホイッスルの瞬間、選手はその場に崩れ落ちた。念願だった全国出場までの快進撃もトーナメント一回戦でストップ。涙を流しながら観客席の応援団に頭を下げる姿には空しさが残った。

前線からのプレスが機能せず、ことごとくボールを支配された。42分、その悪い流れから与えたFKを直接決められると、後半に入っても立て続けに2失点。終盤、前がかりになったところを突かれ、相手のカウンターを食い止めようとした四方田がこの日2枚目の警告で退場するなど、いい所なく3－0の完敗を喫した。

「自分達のプレーが出来てなかった」（藤井）、「負ける相手じゃなかった」（小野川）と、持っている力を100％出しきれない悔いの残る敗戦だった。意識はしてなくとも、ここまでやってきたという達成感、安堵感、そして普段より大きな全国という舞台がそうさせたのか、この日のチームにはいつもの粘り強さ、そして何より3失点目を喫してからは、最後まで諦めずに戦うという全体としての共通意識が欠けていた。常に徹底し続けていたことができなかった。ここまでも決して順風満帆に辿り着いたわけではない。トップチームに加わる選手など、多くのメンバー編成を繰り返しながら、予選ブロックでは下位大学には大差をつけ勝利するものの、上位大学との対戦では勝ちきれないなど勝負弱さを露呈した。それでも2位に滑り込むと、全国出場を懸けた決勝ブロックでは4年生がチームを牽引。「このチームは4年生が引っ張ってくれて本当に感謝している」（塚越）と言うように、彼らの残り少ない大学サッカーへの強い思いが実り、2勝1敗で初めての全国大会に駒を進めた。歓喜を共にし、多くの苦難も乗り越えてきたからこそ、少しでも長くこの仲間でサッカー続けたかったはずだ。

あと2試合を勝利で飾り、全国制覇という形で完結するはずだった夢物語―。それを完遂することができなかった今、下級生はこの苦い経験をどう生かすのか。トップチーム昇格を目指す選手に与えられた貴重な公式戦という真剣勝負の場で、4年生と共に歩み、培った精神を持って来年はさらに上の舞台を目指す。

（上瀧　悠平）